成城だより

III

大岡昇平

文藝春秋

成城だより
III

大岡昇平

文藝春秋

著者略歴

明治四十二年東京に生れる。京都大学仏文科卒。昭和十九年応召、二十年ミンドロ島で米軍の俘虜となった時の体験から執筆された「俘虜記」は戦後文学の代表作の一つとなる。「野火」「武蔵野夫人」「花影」「レイテ戦記」「中原中也」ほか著書多数。

成城だより　Ⅲ

昭和六十一年五月一日　第一刷

定価　一〇〇〇円

著者　大岡昇平（おおおかしょうへい）

発行者　西永達夫

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話（〇三）二六五―一二一一

印刷所　精興社

製本所　矢嶋製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

©SHŌHEI ŌOKA 1986　Printed in Japan

成城だより　Ⅲ　目次

1 寒い正月 7
2 「アマデウス」 30
3 遅い春 55
4 批評の季節 75
5 散歩人生 101
6 野球人生 122

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

7 小説を読む 144
8 八月は悪夢の月だ 165
9 情報過多 192
10 老人顚倒 215
11 エンドレス十一月 236
12 年末多事 254
後記 280

装幀　坂田政則

成城だより Ⅲ

I　寒い正月

一月一日　火曜日　晴　暖

九時、雑煮、おせち、食べすぎとなる。目出度い感じはとっくになく、従ってその言葉も出ない。正月とは暮の連続の意識のみなり。マス・コミ連日一年の総決算を特集して、NHK紅白歌合戦と除夜の鐘実況にて二つの年を繋ぐ。ただし近頃、紅白養老院番組となりてより、失礼してベッドへもぐり込む。十年前白内障手術してより、眼に悪いから長時間のテレビ番組はごめん蒙っている。今年は「浪花節だよ人生は」が、細川たかし、水前寺清子の競演とあっては尚更なり。歌は世に連れ、世は歌に連れは真理なりとするも、戦後四十年、「リンゴの気持はよくわかる」の童謡調よりはじまり、浪花節が人生で終っては、あんまり悲しじゃないか、といったところだ。

晩酌に許されたるビール小瓶一本にて、九時半ごろより、十一―十二時まで宵寝するは、七十五翁――本年三月六日に七十六歳となる――の日課なり。従ってわが新年は深夜より始

まることになり、老人は本を読んですごすほかはない。まずは年の始めの読書なれば、肩のこらない、楽しいものをということになる。

一昨年は飯島耕一の楽しき『永井荷風』だった。昨年は『パルムの僧院』のさわりを読み返した。今年ランボーだった。

老人性溯行——子供がえりなり。もっとも、ランボーには最近機縁あり。昨年は小生同じく老人性溯行にて、一九三〇年に見たアメリカのスター、ルイズ・ブルックスの回想に終始せり。(一月、三月エッセー、九月写真集出版)。写真集の書評の一つ、「マリ・クレール」二月号の巌谷国士氏のものに、ランボーの Lulu を引用す。すなわち「帰依」dévotion 中の句にして、ルイズ Louise と Léonie と共に三人の「どれもまったく正体がわからない」「共通の頭文字Lを持つ女」について書かる。「ルル」の名の起源について、衒学的おしゃべりしながら、わが青春の愛読書ランボーを落せるは大失態なり。あわてた。

わが国にてはリヴィエール『ランボー』(一九三〇年)以来、ランボーの信仰希求を示すものとして有名なる詩篇なり。

「妹ルイズ・ヴァナンド・ヴォランゲムに——北海の方に向いた彼女の青い尼僧帽(コルネット)——難破者のために」(以上、辻野久憲訳、一九三六年、山本書院版に拠る、記念のために)。

リヴィエールは熱意をこめてこの語句の「黙示的な筆触」を語っている。「知の働きが客体をたぶらかして捕えたのではない(略)ただ、魂の一番奥底で、一種の事件が起ったのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

金星のように、或る物が、突然、神秘的に輝き出したのだ」

リヴィエールの論文はまた、ランボーの「見者」の手紙を扱った論文にて、日本に紹介されたはじめだが、その後内外のランボー研究は進んだ。「プレイヤード」が二つの版（一九五一年と七二年）を出した。同叢書で唯一のケースだが、これは新しい生原稿の発見のためだった。日本でもそれに応じて人文書院版全集三巻本が二度出ている。一九五二―五六年版と七六―七八年版で、もはや決定版というべきである。

三人の女性についての詩句を、再録すれば、

「わがルイーズ・ファンナーン・ド・フォーリンゲン尼に。――北国の海に向いた彼女の青い尼頭巾（コルネット）。――難破した人々のために。

わがレオニー・オーボワ・ダッシュビー尼に。――バウー――唸りを立て、悪臭を放つ夏の草。――母親たちと子供たちの発熱のため。

リュリュ――悪魔――に、不完全な教育による、『女友達』の時代の祈禱所趣味を残したままだが。男たちのため！――×××夫人に。」（渋沢孝輔訳）

あと八行あり。ほぼ「ヴィヨン」の「形見わけ」の形に従い、富永太郎はこの作品に倣って「遺産分配書」を書いた。むろんランボーの汚物趣味と狂暴さとの違いは、ここに引用しただけでも、明白であろう。

渋沢氏の註も詳細を極めている。「ルル」はレスビヤンらしい。『女友達』Amies はヴェ

ルレーヌの地下出版レズ詩。ルルは、兄貴ヴェルレーヌ Verlaine のLではないか、との説がある。Lulu は LUcifer（魔王）と LUxure（淫蕩）の縮小ではないか、と巌谷氏は月報に書いている（彼は巌谷大四氏の甥にて仏文学者なり）。

現在、フランスは「リュ」音を避けて、Loulou を宛てる。しかしドイツ人ヴェデキントから「Lulu」の音を輸入する前に、一八八八年のフェリシャン・シャンソールのパントミームに Lulu あり、これはコロンビーヌの中のLを取った愛称短縮形ならんも、七三―五年のランボー詩句にあったのだ。（ランボーの詩には原稿なし、贋作のおそれありとするも、発表は一八八六年、シャンソールより前なり。すでに lulu の綴りにてイタリヤ伝来の道化芝居系に存在したか）

巌谷氏の書評をきっかけに、私はイリュミナシオンを読み直し、十八歳の時の感動を再び味わった。ランボーを読み返そうと思っていた。大晦日にふさわしい読書だった。

私は「おお季節、おお館（やかた）」に「幸福」の字を見付けた。「ぼくが究めた幸福の／奥義を、誰も避けられない」。プレイヤード版では「無題」なるもベリション版では「幸福」の題が与えられていた。私はスタンダールの『パルムの僧院』で、はじめて「幸福」の二字に会った。（「美は幸福の約束である」）と思っていたが、それはランボーにあったのだ。『地獄の一季節』中の「言葉の錬金術」に「俺はすべての存在が、幸福の宿命を持っているのを見た」とある。ただし「『幸福』は俺の宿命であった、悔恨であった、獅子身中の虫であった」と

ランボーでは、すでに挫折と不幸が予感されている。(『パルム』と『赤と黒』も、作者の老年を訪れし幻影にて、「幸福なる少数者」へ向って語られている)

私はフィリピンで立哨中、夕焼の空に並立する積乱雲を遠望して、「酔どれ船」の「古代の劇の俳優(わざおぎ)が並んで進む」の上田敏訳を思い出したことを思い出した。敗走中で小川の岸に休んで、笹舟を作って流した時、「うれひに沈むをさな児が、腹つくばひてその上に五月の蝶にさながらの笹舟を流す」の句を思い出していた。『野火』の敗兵に自分の飢えを「夜明け」のように追い詰めさせてみた。

ランボーがスタンダールと共に、私の中に残っているのを感じていたので、彼を新年の楽しみ読書にするのに何の抵抗もなかった。

私はそれまでに荷風、敏、三富朽葉、富永太郎の訳詩と、小林秀雄の「ランボオⅠ」を知っていたが、ベリション版「著作集」で、原文に触れた時の感動を思い出した。小林論文とアーサー・シモンズ『表象主義の文学運動』によって、「文学破壊みずから文学を作る」セオリーを知っていた。そんな風に読んだと思っていたが、こんど読み返して、ランボーの詩句が、新しい外国語を習う楽しみと共に、私の中に歓喜に似た感情を惹起していたことを確認した。中原中也といっしょに初期詩篇を訳した楽しみを思い出したのである。

「自然よ、彼を抱いてあたためてやってくれ、寒いのだ」「もののもの匂いも彼の鼻翼をうごめかしはしない」「横腹に二つの赤い穴が」

これは申すまでもなく「谷間に眠る者」の一部だが、一八七〇年の普仏戦争の戦場に遺棄された戦死者を歌ったものである。私の生涯の入口で、この詩句に会っていたことに因縁を感じる。「盗まれた心」「烏」「夕の禱り」など未訳詩篇の訳を試みたが、「七歳の詩人たち」や「パリは再び大賑い」はよくわからなかった。「慈恵看護婦」では「おお女、内臓のかたまり」の句にびっくりしただけだった。『地獄の一季節』は、終りの方の「朝」と「別れ」の章しかわからなかった。これらの読解欠陥部分と『イリュミナシオン』を読み直し、考え直すことを怠っては、自分の中のスタンダールもよくわからないだろう、と思い当った。

ランボーを読みつつ、幸福な気分で寝入り、快く目覚む。昨年五月糖尿病悪化して順天堂病院に検査入院し、(血糖値三九〇)以来節食して限界値一二〇以下に維持しあり。始終腹八分目にしていると気分さわやかなり。八年前溶血性貧血という奇病にてくたばり損い、二ケ月入院中についた睡眠剤服用の慣習もとれて、節酒禁煙、実に衛生無害の生活を送りあり。従って言表穏健となり、各誌新年号には気の抜けたような随想しか書けなかったが、文壇はこのところ長らくの無風状態を脱してなかなか活気あるようなり。

「文芸」にては加藤典洋、竹田青嗣、の二新人、江藤淳との鼎談「〈論争〉批評の戦後と現在」にて、江藤の小林秀雄口真似の高飛車話術に屈せず、「しかし」とか「それはわかってるつもりですがね」と延々とかじりついて離れず。「そんなら論文を書いて下さい」と江藤

老に弱音を吐かせる。「文學界」の「日本文学の現在」にては篠田一士、西尾幹二、奥野健男、菅野昭正、山崎正和の各新聞文芸時評担当者、日本文学界の現状と未来を論じて、談論風発す。西尾氏、篠田氏に反論して、一座を圧するは壮観なり。批評家一斉に、流行のなあなあ主義を脱せるは、戦後四十年にふさわしき壮挙なり。この風潮は「文學界」二月号まで続きて、加賀乙彦、三田誠広相手の「対談時評」にて、村上龍をビニ本以下、田中康夫の流行語カタログは何も表現せず、と歯に衣きせずにいう。

各誌二月号暮のうち刷上りて、届く。十二月は商売人にとりては新年号と二月号のダブル月なるなり。

風速急は伝染するものと見え、たまたま見たる「短歌」一月号の年始座談会に、もと実作者いま小説家の秦恒平、実作者篠弘の作品をあげて論難す。短歌評論家笠原伸夫持て余し、仲裁を投げちゃってるはおかし。

老生も丹羽文雄「文壇夜話」（「月刊カドカワ」連載）のボケを指摘したが、これはインタヴュに応ぜしものにて、積極的に論難せるに非ず。吉本隆明その自家刊行誌「試行」第六三号十二月刊にて、埴谷雄高との対談『二つの同時代史』を批判す。問題は埴谷の政治的発言にありて、老生の方は事実誤認の訂正要求のみ。埴谷と吉本は六〇年安保の同志にて、はたより察知し得ざるいきさつあるべし。政治と文学について長尺の反論を書いた。その掲載誌「海燕」二月号、年賀状と共に正月の卓上に届く（「海燕」は他誌と比べて、校了最もおそく、

従って刷上りもおくれて、暮押迫っての発送となったるためなるべし)。

わが爽快なる元旦は、「海燕」の机上にあることによって、翳りたりというべし。

埴谷の反論はいんぎん無礼なるものにて、鄭重なる書簡体にて、吉本の「試行」六三号「情況への発言」の論旨の欠点、事実誤認をあぶり出しにせるものなるも、老生として事態は極めて単純にて、すでに暮のうちに処置ずみなり。

昨夏、吉本「試行」に発表の私信にて、老生発言の事実誤認を指摘し、訂正をうながす。配達証明のコピーが、埴谷、岩波書店にも行き、埴谷にも「配慮」を乞う。われら吉本の異様な行為に驚きて、ひたすらその意に逆わざらんことを期す。幸い十月十五日に第三刷出て、問題の個所を次のように直す。

七月十四日付初版、大岡「あれはおもしろいね。ケチのつけ方が。吉本はスパイで、だから警視庁の玄関から降りて来た、とかね(笑)」

第三版、大岡「あのころはいろんなうわさが乱れ飛んだからな、吉本が警視庁の玄関から降りて来た、とかね(笑)」

小生は「おもしろいね」と言ったおぼえなく、文脈上からも「おかしかった」(変だった、の意)とあるべきで、速記の誤りを見落したか、或いはぼけにてしゃべり損ったか、いずれにしても象嵌の直しなれば、「おもしろいね」を「おかしかった」と直すと申出たれど、吉本承知せず。当時小生山小屋にいたので、岩波出版部員に吉本邸に行って貰うと、要するに

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongboo